

バーチャルウォーク

松尾芭蕉とあるく「奥の細道」 600里 750日

その4 酒田～大垣

八柳 修之

越後路 6月18日に酒田に戻った芭蕉は、24日まで滞在し、25日に酒田を後にした。

聞けばここから加賀の国府金沢まで130里もあるという。鼠ヶ関(6月27日)を越えると、旅路も出羽の国から越後の地へと改まり、やがて、越中の国市振の関に着く(7月12日)、この間9日間、途中の暑さと雨との苦勞に精気を疲れさせ、病気が起こって道の記の記事もしるさずにしまった。この間、芭蕉が書いたメモによれば7月4日出雲崎で「荒海や」の句想がまとまり、「文月や」の句を直江津の俳席で披露したという。

鼠ヶ関 江戸から1,248km 酒田から56km 私の記録： 年 月 日

鼠ヶ関から出雲崎まで198kmもあるので、バーチャルウォーカーのため、主なる通過した町の江戸からの距離をご案内します。

中村 江戸から1,270km 鼠ヶ関から22km 私の記録： 年 月 日

村上 江戸から1,304km 中村から34km 私の記録： 年 月 日

新潟 江戸から1,378km 村上から74km 私の記録： 年 月 日

弥彦 江戸から1,416km 新潟から38km 私の記録： 年 月 日



鼠ヶ関

出雲崎 江戸から1,446km 弥彦から30km 私の記録： 年 月 日

荒海や 佐渡に横たふ 天の河

注釈：旅泊に見る黒々とした日本海の荒海。その荒波の隔てるかなたには、順徳院・日蓮・日野資朝・世阿弥など幾多の哀史を秘め、今また悲しい流人の島として知られる佐渡が島が遠くに横たわり、銀河が白くその上にかかっている。空の二星も交會を遂げるといふこの夜、島の人たちはこの荒海に隔てられた家郷の人々をどんなに恋慕いながら、あの星の橋を仰いで



いうことだろうと思えば、ひとり北海のほつりをさすらう自分の心もしめつけられるような思いがする。そうした人間の思いを包んで、夜の海はあくまでも黒く、銀河はあくまでも高く、天地の寂寥のきわみを呈示している。

直江津 江戸から1,512km 出雲崎から66km 私の記録： 年 月 日

高田 江戸から1520km 直江津から8km 私の記録： 年 月 日

能生 江戸から1556km 高田から36km 私の記録： 年 月 日

市振 7月12日 江戸から1592km 能生から36km 私の記録： 年 月 日

親知らず子知らずの北国一の難所を越えて疲れたので、・・寝たところが、表の部屋で若い女二人の声、年取った男の声、女は伊勢詣の新潟の遊女で男はここまで送って来た。所定めぬ情けない境遇にまでこの世を落ちぶれ、夜ごとに変わるはかない契り、こんな毎日毎日を送る前世の業因はどんなに悪かったのだろう、などと語り合っているのを、うとうと聞きながら寝入ってしまった。翌朝旅たちに際して、「先の道筋もわからぬ道中の心細さ、あまり



にも不安です。見え隠れになりお供して参りたい。・・法衣をお召の上のお情けに、なにとぞ御仏の大慈大悲のお恵みを下され、仏縁を結ばせて下さい」と涙を流して頼むのだった。可哀そうに思い承諾した。

一つ家に 遊女も寝たり 萩と月 曾良

注釈：自分のような世俗を捨てた僧形の旅人と、ゆくりなくも北国辺土の一軒屋の宿に、花やかにも罪深い哀れな遊女も泊まり合わせて寝ている。折から庭には萩がなまめかしく咲きこぼれ、その上を澄んだ月の光が照らしているのが、何となく遊女と自分をめぐり合いを思わせているかのようだ。



道中、遊女がお伊勢参りをしていることが書かれている。江戸時代になると経済力を
 もった庶民はお伊勢参りをするようになったが、東北地方からの人はなんと 2,000km 以上、
 一日に歩く距離は平均して約 34km、平均して一日 10 時間程度歩いてたという。
 スゴイね。 (谷釜尋徳著「歩く江戸の旅人たち」、

滑川 江戸から 1,635km 市振りから 44km 私の記録： 年 月 日
 新湊・高岡 江戸から 1676km 滑川から 40km 私の記録： 年 月 日

金沢 7月15日 江戸から 1,723k 新湊・高岡から 47km 私の記録： 年 月 日

金沢には7月15日から24日まで滞在した。金沢は北陸の中心地として俳諧が盛んで、薫風に心寄せる者が少
 なくなかったからである。金沢に一笑という俳諧の道に熱心だという評判を聞いていたが去年に冬若死にしてし
 まったとのことで、追善の句会を催したのに際し、 塚も動け わが泣く声は 秋の風

注釈：君の死をいたみ悲しむわたしの慟哭の、地中の君が霊に届き、動くべくもない塚も動けよかし。わが慟哭
 の声は、簫殺（物寂しい様子）たる秋風に和し、秋風はわが傷心を運んで、君の塚の上を吹き廻る。

ある草庵に誘われて 秋涼し 手ごとにむけや 瓜なすび

注釈：時節柄、新鮮な瓜や茄子のもてなしもいかにも野趣に富んで涼しげだ。皆さん、ひとつ気楽に、てんでに
 皮をむいて御馳走にあずかろうじゃありませんか。こうしていると、残暑とはいえ初秋新涼の気がしみ通って
 くるようだ。



金沢のあと小松、山中、越前、福井、敦賀、大垣へと向かい旅を終える。



兼六公園

小松： 7月25日 江戸から 1,784km 金沢から 47km 私の記録： 年 月 日

7月24日、多数の門人たちに送られて金沢を後にし、金沢の俳人北枝（北史）の案内で小松におもむき、小松
 の多太神社に参拝した。ここには実盛の形見の兜と錦の切れがある。実盛が源氏に属していた時、義朝公から下
 賜されたものとか。・・・木曾義仲が戦勝祈願の書状を奉納したとことや、樋口の次郎がその使者を勤めたことな
 ど神社の縁起にしめされている。

むざんやな 甲の下の きりぎりす

注釈：かつて樋口の次郎は、実盛の墨に染めた白髪首を検分して、「あなむ
 ざんやな」と落涙したよしだが、今日の前に実盛の着用した甲を見れば、
 樋口と同じく、何と痛ましいことという嘆き発さずにはおられない。
 その甲の下の辺りでは、実盛の運命を悲しむかのように、きりぎりすが
 はかない声をたてて秋を鳴いている。



山中温泉 7月27日 江戸から 1,870 km 小松から 86 km
 私の記録： 年 月 日

山中滞在は7月27日から9泊10日、8月5日までに及んだ。休養のためである。曾良が腹を痛めて療養することになり、山中温泉で別れることとなった。

曾良は別離にあたり 行き行きて 倒れ伏すとも 萩の原 と書き残して行った。

注釈：行く者の悲しみ、残る者の残念さ、あたかも李陵（りりよう）と蘇武（そぶ）との別離の詩にうたわれているように、そこまで二羽いっしょに飛んでいた片方の鳥（けり）が、友に別れて雲間に迷い行くがごとき思いである。

そこで自分もまた

今日よりや 書付消さん 笠の露

注釈：今日からは、これまで旅の笠に書きつけてきた「同行二人」の文字を消そうか。別離の涙と置きあらそう笠の露で。



曾良というよき従者、記録者を失い、この日以後の芭蕉の実際の動静は明瞭ではなく、以後、訪れた所の日付は明瞭を欠くので記載しない。



全昌寺



天龍寺



永平寺



山中温泉

大聖寺・全昌寺 江戸から 1,881 km 山中より 11 km 私の記録： 年 月 日

大聖寺の城下はずれ、全昌寺という寺に泊まる。ここもまだ加賀の地である。曾良も前の夜、この寺に泊まって、
よもすがら 秋風聞くや 裏の山 曾良

注釈：一晩中、眠りにつけずに、裏山の木立の上に吹きわたる蕭々（物寂しく風が吹く）たる秋風の音を聞き明かしたことだ。師に別れた一人旅のさびしさに

松岡・天龍寺 江戸から 1927 km 大聖寺・全昌寺から 46 km 私の記録： 年 月 日

天龍寺の住職は、旧知の間柄なので訪問する。金沢の北枝（ほくし）という者が、ほんのそこらまでと見送りながら、とうとうここまでついて来た。この男は、道すがら所々の風景を見逃さずに句案を続けて、時折趣深い着想の句など聞かせてくれた。今、いよいよ別れるに際して、

物書きて 扇引きさく なごりかな

注釈：夏中手慣れた扇も、おりから手放すべき時節になったが、君ともいよいよ別れねばならぬ時が来た。別離の形見に酬和の吟を書きつけて、二つに引きさき、それぞれに分けて名残としよう。

永平寺 江戸から 1,939 km 天龍寺から 12 km 私の記録： 年 月 日

道から五十町山に入って、永平寺に参拝する。ここはかの道元禅師の開基のお寺である。

福井 江戸から 1958 km 永平寺から 19 km 私の記録： 年 月 日

この土地には等栽という古くから知られた隠者がいる。いつの年だったか、江戸にやって来て私を尋ねてくれたことがある。はるか十年以上も昔のことだ。今では老い衰えていることか、それとも死んでしまったらうかと、人に聞いてみると生きていて、家はどこそこだと教えてくれた。みすばらしい家、二晩泊り敦賀の港など案内してくれた。歌は詠んでいない。

敦賀・色浜 8月15日 江戸から2030km 福井から72.5km

私の記録： 年 月 日

次第に白根が岳が隠れて見えなくなり、代わって比那が岳が現れる。歌枕の鶯の関を過ぎ、古戦場の湯尾峠を越え、義仲の城跡燧が城に出る。名月の前の日の14日の夕暮れ敦賀の港に着いて宿をとる。その夜は月が特によく晴れた。「明日の夜もこんなに晴れてくれるだろうか」と言う。亭主が「この北陸地方の常として、天気が変わりやすいので、明日の名月の夜の曇るか晴れるかは、どうも予想が付きません」と。氣比の明神に夜参りする。



白根山



義仲の燧が城跡



敦賀の港



色が浜

氣比の明神は仲哀天皇の御陵。境内は神々しく、神前の白砂がまるで一面に霜を敷いたように見える。その昔、遊行二世の上人が、大願を思い立たれたことがあって、ご自身で葦を刈り、土や石をにない運び、・・・参拝往来の支障がなくなった。・・・歴代の遊行上人は必ず神前に砂をにない運ばれる。「これを遊行の砂持ちと申します」と亭主が話してくれた。 月清し 遊行の持てる 砂の上

注釈：空は晴れて月の光は清い。二世他阿上人に始まって歴代の遊行上人の持ち運んだと聞く神前の白砂の上にさしている月の光は、ことさらに清らかな感じがする。

15日、亭主のことばにたがわず、雨が降る。

名月や 北国日和 定めなき

注釈：仲秋の名月。せっかく期待して来たのに、前夜あんなによく晴れていたのが、北国の天気はまったくかわりやすいものだ。雨名月になってしまうとは。



氣比神社 日本三大大鳥居

種の浜 16日、空が晴れたので、西行上人の古歌に知られるますおの小貝を拾おうと、種の浜に舟を走らせる。浜まで海上7里ある。浜はみすぼらしい漁師の小屋があるだけで、かたわらにさびれた法華寺がある。その寺で茶を飲み、酒を温めなどして雅興を尽くしていると、おりから、古来文人墨客の哀惜していた秋の夕暮れの寂しさの趣には、何ともいえないものがあった。

寂しさや 須磨に勝ちたる 浜の秋

注釈：この夕暮れの寂しさ。「源氏物語」以来、寂しさの極地とされてきた須磨の秋に比べても、この浜の寂しさは、なお立ちまさっている。

波の間や 小貝にまじる 萩の塵

注釈：さざ波の寄せる浜辺の、波の絶え間に見ると、

砂浜の上には西行が歌によんだますおの小貝がいっぱいに散らばっていて、よく見ると、その小貝の間には萩の花屑も散りまじっている。 その日の遊興の概略を等裁に書かせて、この寺に記念に残した。



種の浜

関ヶ原 江戸より2089.5km 敦賀色浜より59km 私の記録 年 月 日

大垣 8月21日(陽暦10月24日) 江戸より2106.5km 関ヶ原より17km

完歩：私の記録 年 月 日

8月21日、馬の背に助けられて、大垣の庄に入ると曾良も伊勢から来あわせ、俳諧同人一同、如行の家に集まった。そのほか親しい人々が集まって、まるであの世から生き返った者にでも会うかのように、無事を喜んだり、疲れをいたわりしてくれる。・・・長旅のつらい思いもまだ抜けきらないのに、すでに9月6日ともなったので、

伊勢の遷宮を拝もうと、また舟に乗って、

蛤の ふたみにわかれ 行く秋ぞ

解釈：離れがたい蛤のふたと身が別れるように、尽きぬ名残を惜しみつつ、人々と別れて、今や二見が浦へとまた新しい旅に発足する時が来た。

おりから秋もまさに逝こうとして、四囲の風物はいちだんと惜別の情をかきたてているかのようだ。 完



注釈者尾形侑コメント：顧みれば、「前途三千里のおもひ」を吐露した「旅立ち」の章に続く「草加」の章に「もし生きて帰らば」とあったが、「蘇生の者に会うがごとく」とあるように、芭蕉はまさに詩への旅、歴史への旅から蘇ったのである。・・・「おくのほそみち」の世界は、いわば、「行く春や」「行き秋ぞ」を底辺とし、流転の相の中に永遠への思いをひびかせた「平泉」の章を頂点とする三角形の構図としてとらえることができるだろう」としている。

「奥の細道」の解説本は多数出版されているが、著者の解説によるところが多いようだ。なにその句、そのまんまではないかと思う句でも、その句が詠まれた背景、状況を知ることによって芭蕉の句の奥深さを知るバーチャルウォークであった。今、作者の想いと共有できる旅がないか模索している。完

(挿入した画像、地図はすべて無料画像によっています)